おれたちバーチャルボーイズ！

koji6004

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おれたちバーチャルボーイズ！

【Nコード】

N8129Y

【作者名】

koj16004

【あらすじ】

『赤い光を見てから記憶がない』と証言する通り魔事件容疑者のニクスを見たジツオ少年は、その日が始業式で六年生になったばかり。

放課後ゲームセンターから意気揚々と帰宅すると、見知らぬ叔父さんチュウタ氏がお客さんとして来ていた。ジツオはチュウタ氏の誘いが断れず、彼持参のテレビゲームをすることに。しかしその常軌を逸した内容、そのゲーム機を巡る争いによって、ジツオの生活が一変する。ジツオの運命はいかに！

赤い光とその謎

—

(……… 続いているニュースです。仮想県仮定市で男が刃物を持って暴れるというニュースが入っています。目撃者に拠りますと、男は突然奇声をあげ、鞆に忍ばせていたナイフを持って周囲を威嚇、通行人を切りつけようと暴れましたが、通りがかった無職の男によって取り押さえられ、その後通報によって駆けつけた警官が傷害未遂の疑いで逮捕したとのことです。容疑者は『突然赤い光が見えて、気がついたら取り押さえられていた』と話している模様です。この事件により容疑者を取り押さえた無職の男が、容疑者に切りつけられ軽傷を負っています……)

「赤い光赤い光……馬鹿は高いところが好き、狂人は赤い光が好きってね。それにどうよ？ せっかく取り押さえて怪我までして、無職無職ってそりゃないよ。そりゃ無職なんだろうけどね、そつとしてやるつよ」

「ジツオ！ なにテレビと話してるの、あなた学校行かないとだめな時間じゃない？ そんなだとあなたが無職になるわよ」とジツオの母はシステムキッチンの向こう側から言った。

「大丈夫、こちらら伊達に六年まで登りつめたわけじゃないよ。登校にかかる時間も心得てる」と日源実男ことジツオは言った。ヒケンジツオ

ジツオの母はジツオのトーストが一枚まるまる残っているのを見て「まだ食べてないの？ 早く食べなさい」と言った。

ジツオはなにも理由もなくトーストを食べ残しているわけじゃない。トーストをくわえて角を曲がれば、美人でおてんばな転校生とぶつかる確率があがると思ったからだ。もちろん本心から信じているわけではないが、始業式の今日は絶好のチャンス。ジツオはなにも試してみなければ気がすまないタイプなのだ。

しかしジツオは空気も読む。ランドセルを拾い上げ、「じゃ、行

つてきます」と言ってからトーストをくわえ、学校へ向かった。

始業式前のホームルームが終わってから「ジツオ、おひさ。学校
来的时候パン食べてたでしょ？」ときいたのはジツオの同級生、吉
田良子シタヨシコで彼女のあだ名はイーコだった。

「食べてたよ、それがどうかしたかい？」

「なんで？」

「理由なんかない、そんなこと忘れてくれ」

「転校生とぶつかりたかつたんでしょ？」

「……へー、おもしろいね。それいただいた。転校生とぶつかりた
かった、柵の向こう側の女子と知り合いたかつたんだ」

「はあ？ 意味わかんない、変なやつ」と言つてイーコはジツオに
軽蔑した眼差しを向けたあと、「ミキちゃんそれでさー」と甲高い
声を出してミキちゃんのもとへ戻つていった。

ジツオはたった一人の友達といつて過言ではない相原秀太アイハラシュウタことシ
ユタイン 五年のとき学級委員長をしていて秀太委員長、それに
アインシュタインをもじつてついたあだ名 のところにいった。

「シュタイン、ひさしぶ。なんか変わったことあった？」

「おお、ジツオ。なんもないよ。いつもと同じ。塾マダばっかだね」

「大変だねー、中学受験だっけ？ ご苦労なこつて」

「おまえは受けないの？」

「おれは受ける気ないね」

「受けとけばあとはエスカレーター式で楽できるのに」

「人生山あり谷あり、樂することはかり考えてはいかんのだよ」
「そりゃそうだよ。だからさ、いま頑張るかあとで頑張るかって話
だろ。それにさ、たぶん人生つてずつと頑張りっぱなしだぜ、でき
るやつはな」とシュタインは瞳をぎらつかせながら言った。

「うん、そうだね。シュタイン、きみは正しいよ。でき、今日学校
終わったら遊びにいかない？」

「おう、いいよ。なにすんの？」

「とりあえずゲーセンにでもいこうぜ」

UFOキャッチャー、プリクラ、テレビゲーム、エアホッケー、パチンクマシン、パチンコ、スロットなど。

いろいろな人がゲームで遊んでいる。お年寄り、おじさん、おばさんも。「子どもにはゲームするなって言うくせに自分たちはするんだな、これ。そもそもゲームって子どものものなんじゃないの？」とジツオは言った。

「大人も大して変わんないってことだね」

ジツオとシユタインは日が暮れるまでゲームセンターで遊んで、家に帰った。

「ただいま」と言っただけでジツオが帰宅すると、玄関に見慣れない靴がある。誰が来ているのか知らないけどなるべく関わりたくないな、でも挨拶ぐらいはしないとあとで父か母、もしくは両方に文句を言われるかと思ったので、ランドセルを部屋に放り投げてリビングに向かった。

ソファにジツオの父と母、細いジツオの父みたいな人が座っていた。ジツオは「どうも」と細いほうに会釈した。その人は「ジツオくん、おかえり」と言った。彼の足元に大きな飴色のトランクがあるのにジツオは気づいた。

ジツオの父は「おまえの叔父さんだよ。懐古忠太、カイコチュウタチュウタおじさんだ」と説明した。

「おまえ遊んでもらったことがあるんだぞ。憶えてるか？ おまえはまだおしめをしていたがな、はっはっは……」

ジツオの母は「まあ、あなたいやだ、おほほほ」と言った。

「はは、兄さんはいつもおもしろいこと言うね」

頃合をみて「どうも、遊んでもらったようで、ありがとうございます」とジツオが真顔で言うと、笑っていたみんなが静まり返った。「父親譲りだ」とチュウタ氏が言うと、ジツオの父と母はなにがそ

んなにおもしろかったのかわからないが、大笑いした。

「ジツオくん、ゲームでもしない？」とチュウタ氏はジツオを誘った。

「叔父さん、なんのゲームをするんですか？」

「テレビゲームだよ」

大人になってもまだテレビゲームか、おっさんとテレビゲームなんてしたくないけどつきやってやるか、とジツオは思って「一応新しいやつ揃ってると思います」と言った。

「持ってきたのがあるから、それで遊ぼう」と言ってチュウタ氏は飴色のトランクを二度叩いた。指に絆創膏が巻いてあるのに気づいた。重症だな、とジツオは思った。

ジツオは自分の部屋にチュウタ氏を案内し、部屋に入るとなぜだかいつもと違うような心地がした。ドアがゆっくりと閉まる音を聞くと、いつもより静かな気がするなと思った。

直後によくわからない力によって世界が波打ち、ぐるぐると回転目に見えていたものがきれいさっぱり消え去り、どこまでも続く真っ白な空間にジツオとチュウタ氏は取り残された。

ジツオが驚いて言葉を失っていると、チュウタ氏が「大丈夫。元の世界には絶対に戻れるから」と声をかけた。

「落ち着いて。……さあ、ゲームを始めよう」

二

チュウタ氏は飴色のトランクを地面に置き、開いた。なかには赤い双眼鏡と三脚、ゲームのコントローラーが二組あるようで、チュウタ氏はそれを組み上げ始めた。

ジツオは自分はなにかの間違いで死んでしまったのかと思ったが、これはどちらかといえば、死んでいるというより夢を見ているとい

うほうが近い気がする、というより、夢のほうがいいな、と思った。飯に死んでいるとしても、この世界が続いていくとしたら、この世界なりに生きていかないと。ああ！でもこんな真つ白な世界は退屈で死にそうだ！一度死んだ人間が二度死ぬことなど……。

「ジツオくん、聞いてるかい？」

「え？」

「聞いてくれ。なにから話せばいいか、どう説明したらわかってもらえるか自信はないけど、ぼくは真実のみを話す」

よりによってよく知らない叔父さんだけはいるんだよな、とジツオは思った。最悪。

「アズ・ユー・ライク」とジツオはつぶやいた。

「ジツオくん！」

チュウタ氏はジツオを引っぱたこうと手を振り上げたが、ジツオが身を仰け反らせて「はいはい、わかりましたよわかりました」と言ったので振り上げた手を下ろした。

「聞かせてくださいよ。ちょっとはおもしろい話してくださいよ」

「ぼくには落語家になった友達がいる」とチュウタ氏は言った。

「……『赤い光を見た』といって暴れる人たちのことは知っているかい？ まあ知らないとしてもそういう人たちがいるんだ。だいたいは十年ほど前からそう供述する人たちが現れた。彼らには『赤い光』以外にも共通点がある。だいたいが男性だということ、歳は三十前後であること。そして、あるものを所有していること。そいつがなにだかわかるかい？」

そう言つてチュウタ氏は組み上げた二組の双眼鏡らしきもののほうへ視線を向けた。ジツオもそれを見たが、なにかわからなかったので「いえ」と答えた。

「そいつはバーチャ……おっと、名前を出すのとはばれる。とにかく、そいつは業界最大手の会社が製作したというのに一年持たなかったものなんだ。二十年ほど昔の話さ。どうしようもないクソゲーで会社の黒歴史、輝かしい業績を残している会社の汚点 知っ

ている人はみんなそう思っていると考えていい。でもそれは、あくまで表向きの話なんだ。実は、そいつはいわくつきだったのさ」

チュウウタ氏は自らの話に満足して、二度うなずいた。

ジツオは叔父さんは心の病気なんだな、と思った。

チュウウタ氏は身振り手振りを交えて話を続けた。

「そのゲームの開発の基になったのが、ある大国が開発した軍事演習訓練機だ。その訓練機は、スコープを覗き込むとまるでその場にいると錯覚するほどの3D映像が赤い光で表現されるというものだった。軍隊に必要なのは勇敢な兵士だ。赤い光の仮想空間　そこで訓練させれば、死の恐れさえ克服した兵士を増産できる、と軍の上層部は考えた。ところがそうはならなかった。その訓練機は死をも恐れない兵士を増産するどころか、使用した兵士のほとんどを骨抜きにした。一度使用すると寝食を忘れてゲーム　おっと訓練に没頭するようになったからだ。間違いに気づいた上層部はすぐにその訓練機を禁止したが時すでに遅し。もう体制を維持できるだけの兵士は残っていなかった。体制の崩壊、そして情報の流出ってわけさ」

「へえ、興味深い話ですね」とジツオは優しさから言った。

「まだ続きがある」とチュウウタ氏が言ったので、ジツオは嫌な気持ちになった。

「崩壊直前の情報資料に『訓練機に没頭した兵士に異変が現れた』というものがあつたんだ。……繋がってこないかい？」

「赤い光を見たという犯罪者ですか？」ジツオは自分の叔父さんが取り憑かれている妄想の内容が理解できてきたと思って、少し安心した。

「そう。一連の犯人はおそらく中毒症状が進行して、精神に異常をきたしていると考えられる」

「でもそれだとニンテ……」

「よせ！　死にたいのか！　その名前は使つな！」とチュウウタ氏はすごい剣幕で怒鳴った。

ジツオは妄想にどっぷりつきつた叔父さんを見て、やっぱり安心できないなと思った。

「ああ、すみません。では例の組織はどうやってその情報を？」

「当時世界中のほとんどのシェアを持っていたからね。金なら払えたはずさ。いざとなれば髭の土管工、という手もある」「なるほど」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8129y/>

おれたちバーチャルボーイズ！

2011年11月24日01時53分発行